スワーミ・ムクターナンダのディヴィヤ・ディークシャー

神聖な伝授

精神的な自叙伝『プレイ・オブ・コンシャスネス』の第 10 章で、バーバ・ムクターナンダは、彼のグル、バガヴァーン・ニッティヤーナンダがシャクティパート・ディークシャー、神聖なる伝授を彼に授けた朝のことを、詳しく語っています。バーバはこの朝について、彼のサーダナーを奮い立たせ、彼の人生で追求していた至高なる自己との一体化を成就させる、極めて重要な出来事としてたたえながら述べています。

***

『プレイ・オブ・コンシャスネス』第 10 章

1947 年8月 15 日――何という吉日！　何と甘美に満ちた日！　何という神聖なる日！　その日は、後にどれほどの功徳と幸運をもたらしたことか！　何度も生まれ変わった生のうちでも、その日は私にとって最も幸せで、最も祝福すべき日であった。こよなく神聖で、そうだ、その日は吉兆の日々の中でも最高に吉兆の夜明けだったのだ。

太陽がわずかに昇りかけ、辺りは静けさに包まれていた。私は東側の端に立っていた。瞑想ホールからは、グルデーヴの鳴らすかすかな喉音が聞こえていた。それは、彼が大いなる自己についての瞑想から出て来るサインでもあった。しばらくして、彼が部屋から出て来た。その日の彼はいつもと違って見えた。実際のところ、そんなふうに彼が見えたのはそれまでなかったことだった。

彼は美しい木製のサンダルを履いて、行きつ戻りつしながらほほ笑んでいた。そうかと思うと、ひととき、片隅に行っては神秘的なマントラを唱え、そして、私の前に来るとまた、にっこりするのだった。彼は歌い始めた。白いショールをまとい、その下は腰布だけで、足にはサンダルを履いていた。彼は何度も、いとしさに満ちた喉音を立てながら、私の前に来て立ち止まった。そうして、1時間もたったであろうか。

すると彼が私に近づいて、私の体に触れたのだ。私の体はこの新しい驚嘆すべき出来事にあぜんとした。私は西の方向を向いて立っていた。グルデーヴは、体を私にぴったり付け、向かい合って立っていた。目を開くと、グルデーヴがじっと私の目を見入っていた。彼の目がシャームバヴィ・ムドラーで私の目と一つになっていた。私の体はすっかりまひし、目を閉じることもできなかった。もはや、目を閉じたり開けたりする力もなかったのだ。彼の目の神々しい光は、私の目の動きを完全に静止させた。そうやって、私たちは立っていた。

しばらくすると、グルデーヴの聖なる喉音、「フーム」が聞こえた。2、3歩、彼が離れると、私はようやく意識を少し取り戻した。すると、彼がこう言うのだ。「このサンダルを持って行きなさい、履いてごらん」。それから、彼は尋ねた。「私のサンダルを履くだろう？」 私は仰天してしまったが、敬意をもってはっきりと答えた。「グルデーヴ、このサンダルは私の足で履かれるべき物ではありません。バーバ・ジ、これは私が一生をかけて敬うべきものです。私のショールを床に広げますから、どうか、その上に脱いでいただけないでしょうか」

グルデーヴはそれに同意してくれた。喉音をかすかに発しながら、左足を上げると、私が広げたショールの端にサンダルを脱いだ。左足を下ろすと、次に右足を上げて同じようにサンダルをショールの上に脱いだ。彼は私の正面に立ち、再び私の目をじっと見詰めた。私は彼を注意深く見詰めた。すると、彼の眼球から光線が流れ出て、それが私の中に直接入ってきた。それは焼け付くような灼熱（しゃくねつ）の光で、その光輝は高熱の電球のように私の目をくらま

してしまった。バガヴァーン・ニッティヤーナンダの目から出た光が体の中に入ってくると、驚きと畏敬と恍惚（こうこつ）感と恐れで、体中が総毛立つのを感じた。

私はマントラ、グル・オームを唱え続け、その光から出るさまざまな色を見詰めた。黄金色だったり、サフラン色だったり、深い青色だったり、それは星の輝きよりもまばゆい、途切れることのない神聖な光の流れであった。私はそのまばゆい光が自分の体内に入って来るのに見とれて驚愕し、そこに立っていた。私の体は微動だにしなかった。しばらくして、グルデーヴは少し体を動かすと、「フーム、フーム」と喉音を立てた。私は意識を取り戻し、サンダルに額をつけてお辞儀をし、それをショールにくるむと、彼の前にひれ伏した。そして、歓喜に満ちて立ち上がった。

グルデーヴは、ホールの西側に行って、花、バナナ2本、数本の線香、クムクムの小箱を持って戻って来た。彼はそれらすべてをサンダルの上に載せた。私は「グル・オーム、グル・オーム」と唱え始めた。

彼は話し始めた。「すべてのマントラは同一のものだ・・・すべてがオームであり、オーム・ナマー・シヴァーヤ・オームはシヴォーハムであるべきだ。シヴァ、シヴァもシヴォーハムであるべきだ。心の中で唱えるがよい。声を出して唱えるより、心の中で唱えた方がはるかによい」。そして、「フーム」と喉音を立てながら、部屋に入って行った。

彼は、青いショールを持って再び出て来ると、なんと、それを私の肩に掛けてくれたのである。次に彼は、バナナのバジャーを油で揚げている台所に入ると、両手にそれをいっぱい抱えてきて、サンダルを包んだ私のショールの上に置いた。そしてついに、恍惚感に満ちた「フーム」と喉を鳴らすと、私に立ち去るよう合図をしたのである。

私はサンダルを頭の高さまで上げたまま、ホールから出た。バジャーを一つ一つ食べ、花の芳香を何度も嗅いだ。ショールの持つなめらかさと麗しさと素晴らしさは、私を心底、魅了した。私は己の幸運を祝し、パラシヴァの類いまれなる恩恵をたたえつつ、ゆっくりと帰路に就いた。グルに対する愛と、自分と彼との一体性を幾度となく感じた。感情の波が私を包み込み、ニッティヤーナンダとの一体性はますます深まっていった。

シュリー・グルデーヴのサンダルは、私の頭上にあった。ガンジー・スクエアまで来ると、現在のシュリー・グルデーヴ・アーシュラムの境界線である、小さな排水溝を渡った。そのすぐそばにはアウダーバラの木が植えてあって、それに手を伸ばすと、私の聖なるグルバーヴァがブラフマバーヴァ、すなわち絶対なる者との一体感になった。その瞬間、私は万物に潜む唯一のものを感知し、唯一のものから万物を見て内外の違いを見る一般のマインドを失ってしまった。「グルは内にいる。グルは外にもいる」と思いながら、「グル・オーム、グル・オーム」と唱え続けた。すると、さまざまな師から学んだ、ブラフマン、絶対なる者についてのヴェーダーンタの教えが私の中で再びひらめいた。

私はまた、雨の神、ヴァルナからも祝福を受けた。小雨がさらさらと降りだして、涼しいそよ風が吹き出したのだ。私は目を開けたり、閉じたりした。目を閉じると、数え切れないキラキラした光の群れが見え、無数の微細な閃光（せんこう）が私の内側から放たれているのが見えた。私はそれを見詰め続けた。なんという美しさだろう！　その無限に小さい閃光は、私の体内を思いも寄らぬ速度で駆け回っていた。その数とスピードに、私は驚きと畏敬の念をもって眺め入った。

今度は目を開けた。すると、外側にも同じように繊細で、キラキラ輝く青色の閃光が、辺り一面にきらめいているのであった。私は畏怖の念と恍惚感に我を忘れた。それは、まったく新しい体験で、それもスクリーンで起こっているのではなく、私の内外で実際に起こっているのであった。あまりにもゆっくりと歩いていたので、果たして自分が道に沿って歩いているのか、はたま

た道が私に沿って動いているのか分からないほどであった。ガーヴデーヴィーの神殿近くに立ち止まると、顔は自然にガネーシュプリーの方に向いた。いとしいグルデーヴを想い、心の中で再びお辞儀をした。そして、道の端を歩き続けた。

ヴァルナの祝福である小雨は、まだ降り続いていた。小雨が青い光線と混じり合っているさまは、こよなく美しいものであった。心では大いなる自己であるシュリー・グルデーヴを思い、頭上には神聖なるサンダルを載せて、私はゆっくりと歩いた。今日でも、あの日のグルとの一体性の体験を思い出すことができる。今でもまだ、あの小さな青い点を見る。

ついに、私はヴァジュレーシュワリ寺院に着いた。その寺院の後ろにもう一つ小さな寺院があって、そこにダッタートレーヤーが祭られていた。私はそこに住んでいたのだ。私はグルのサンダルを敬い、瞑想するために寺院に入って行った。

なんという途方もないことが起こったのだろう。

なんという偉大な、祝福に満ちた日であったろう。なんという神聖な日であったろう！
私の苦悩は取り除かれ、罪は拭われ、輪廻（りんね）の回転に終止符が打たれ、無知のベールは外された。

こうして、彼は聖なる伝授を私に与えてくれた。

デザインレイアウト：Mazie McCrady

Adapted from chapter 10, “Initiation,” in Swami Muktananda, Play of Consciousness: A Spiritual Autobiography, 3rd ed. (S. Fallsburg, NY: SYDA Foundation, 2000), pp. 73–81.

© 2000, 2022 SYDA Foundation®. 著作権所有。
複製、投稿、配布を禁ず。

© 2022 SYDA Foundation®.著作権所有。